

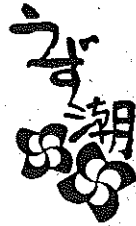
(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

四十億年にわたる生物進化の歴史の中で、特に目覚ましい進化あるいは生物の出現と呼ぶべき事象が幾度かあった。著名な例として、前カンブリア紀における多細胞生物の出現と、新生代とともに始まった哺乳(ほにゅう)類の適応放散が挙げられる。前者の例では、海は巨大な実験場となり、後者の例では、恐竜の絶滅によって、それまで占められていた生態学的ニッチ(「場」)が開放され、そこで生き残った哺乳類が爆発的に広がっていったという。

一つは、新たな生態学的ニッチの出現が、一つは、それまで占有されていた生態学的ニッチの開放が引き金となった。こうした事象を通して、大きな進化変化が起き



やまもと たろう
山本 太郎

変化の町は解放?

るためには、安定化からの解放と競争のない環境が必要・前提条件になると考える人たちがいる。生物は長く安定した環境に置か

れると、安定化淘汰(とつた)の下で身動きできなくなることがあるというのが「進化中立説」で有名な集団遺伝学者木村資生である。安定化淘汰とは、集団平均に近い個体が最も適応度が高く、そこから離れるほど適応度が低下するという淘汰。極端な個体を除去する淘汰といえるかもしれない。普遍的に自然界に存在する淘汰の様式と考えられている。

こうした生物学的進化の歴史を振り返ってみることは、その他の分野について、特に変化や変革、革新といったことを考える際に有用な

部分がある気がする。生物は長く安定した環境に置かれると、安定化淘汰の下で身動きできなくなることがあるというのは面白い。さらにいえば、大きな進化変化を起こすためには、その安定化からの解放と競争のない環境が必要・前提条件になるといえるのもっと面白い。

閉塞(へいそく)感の広がる社会の中で、その閉塞感を打ち破るための飛躍、そうしたことを目指すためには、一度、「安定からの解放」と「競争からの解放」の二つの解放が必要なのかもしれない。これは、もしかするとさまざまな社会現象を考えていく上でも重要な視点かもしれないと思った。

(長崎大熱帯医学研究所教授)